

# 人種主義とイスラモフォビア - 英国を事例として

北海道大学 樽本英樹

## 1. 問題の所在

グローバル化した現代において、国際移民やエスニック・マイノリティをめぐる人種主義や外国人嫌悪は世界的に解決を要する緊要な問題となっている。解決のためには、両者とそれらへの対処が社会によって異なる現れ方をするという理解をする必要がある。本稿の目的は、英国社会において人種主義と外国人嫌いがどのような問題として現れ扱われているのかを示すことにある。

## 2. 人種マイノリティの登場

英国における人種主義は、移民の登場によって本格化したと言えよう。新英連邦移民は、1950年代初めからはカリブ海諸国から、60年代初めからはインドから、60年代半ばには東アフリカ諸国から、60年代終わりから70年代にかけてはパキスタンとバングラデシュからやって来た。その結果、白人系移民ではない肌の色の違う移民たちが英国国内に定住することになった。

## 3. 人種差別の顕在化とその制度的対処

新英連邦移民の登場は、英国の人種主義を先鋭化させた。移民たちは旧大英帝国の一員とはいえ、「他国」の人々であり、白人系住民にとって移民たちは、「脅威」に見えた。そして人種差別が頻発し、「暴動」など人種間コンフリクトに発展していった。そこで英国政府は対処を迫られることになった。主な施策は、1965年と1976年の人種関係法 (Race Relations Act) である。その結果、英国における人種差別禁止は、公共の場から社会領域へ、直接的差別から間接的差別および制度的差別へと広がっていった。しかしこのような差別禁止の拡張も、ある特定の認識枠組みの上に成り立っていた。差別は人種集団間で生ずるというものである。

## 4. イスラム教徒とイスラモフォビア

人種関係パラダイムは、2010年代に入った今でも英国の基本的な政策前提として機能している。しかし、このパラダイムにうまく当てはまらない新たな動きが生じてきた。イスラモフォビア (Islamophobia) である。イスラム教徒が存在感を示すようになったのは、1988年に発刊されたサルマン・ルシュディ (Salman Rushdie) の『悪魔の詩』 (Satanic Verses) をめぐる反応以来である。その後、イスラム教徒を中心とした運動や活動も活発になった。イスラム教徒が存在感を獲得していく過程と平行して、イスラモフォビアが現れてきた。極端ながらも最も力を持ち、イスラモフォビアの特徴をよく示しているのは、極右による反イスラムキャンペーンであろう。

## 5. 考察と結論

反人種差別を推進する制度が人種関係パラダイムであるのに対して、現実にはイスラモフォビアと呼べるイスラム教という宗教に基づいた差別が顕著になっている。しかし、少なくとも英国のマイノリティ差別への対処が、いまだ人種を基礎とした人種関係パラダイムであることは間違いない。そして人種関係パラダイムに基づいた多文化主義 (multiculturalism) は一定程度の有効性を発揮している一方、いくつかの要因がムスリム・パラダイムに基づく多信仰主義 (multi-faithism) をいまだ未発達にさせているのである。